

国際総研ウィークリー第355号 組織破壊攻撃には闘う以外道はない

国際労働総研が発行している「国際総研ウィークリー355号」に『1970年、マル生と呼ばれた労組破壊攻撃に対してどう立ち向かうべきかを当時動労東京地本松崎書記長が講演した内容』が掲載されています。



【泣き言を言っても現実是不変】国労でも動労の他の地方本部でも暴力的な分裂策動がやられている。「闘えば分裂する」と言ったある地方本部の委員長がいますが、この人は安保闘争を決める際の全国代表者会議で、「安保闘争を決めただけでゾロゾロ脱退してしまう」と泣きごとを言っていたわけです。



【目的は闘う未来のリーダー破壊】特に青年部に対する非難・中傷を繰り返すことによって、組織の戦闘性を低めようとするでしょう。いついかなる場合も、青年労働者こそが、歴史創造の主体だからです。反動的指導者は、闘う青年労働者に対する弾圧を陰に陽に仕掛けてきます。右翼的な労働運動の指導者は闘う者への敵対活動をするのです。「組織のためだ」とかの言辞をもって、内外からの攻撃が加えられることを十分把握をしておかなければなりません。資本、当局の側の攻撃の一つひとつにいかにか組織的に対決していくのか、その質を自らがいかにか創造していくのか、これは緊急な課題となっている。勇気をもって一切の妨害と対決しなければならない。



【己の心に正直な運動を】現在の敗北的な事態や労働運動の右翼的再編成、そのただ中で行われる闘争の放棄や歪曲に正直に頭にこなくてはならない。現実の運動を闘わざる方向に歪曲している「権威者」達の解説書などを見ても、あまり参考にならない事は理の当然といえます。

【攻撃の本質を見抜き闘おう！】単純に思想攻撃だとして捉えるのであれば、我々は敗北を刻印されるのです。組織攻撃に対して柔軟な戦術を駆使するが、しかしそれは腑抜けた幅広イズムとは無縁である事をこの際明らかにしておきたいと思います。闘う者・闘う組合に対するイデオロギー的・組織的攻撃は更に強化されるであろう。そして右翼的幹部は、その攻撃や分裂に結果的に手を貸す事になる行為をいろいろ行うかもしれない。いずれにしても少数になる事を我々は願わない。少数になってはならないと思う。しかし少数になる事を辞さぬ断固たる闘いを通じてしか少数になる事を拒否する事はできない。多数である事を目的として追求したならば、質的に墮落するだけではなしに、量的にも今日の攻撃の中では少数に追い込まれてしまうでしょう。



松崎前顧問も「組織破壊攻撃には闘わなければ道は切り拓けない」と言及！
八王子地本ホームページにウィークリーNo.355を掲載。検索は「東労組八王子」で

